解説

高砂の梗概

九州肥後の国、阿蘇の宮の神主友成、都へ上る道すがら、播州高砂の浦に立ち寄れり。こゝに老人夫婦来たりて、松の木影を清むるにより、高砂の松はと尋ぬれば、老人はこの松なりと指し教え「高砂、住の江の松を相生の松といえるは、古今集の序より出でたることにて、高砂を万葉集の上代に、住吉を今の延喜の御代に譬えたるなり」と説き、さらに松の万木に優れて目出度き木なる謂われを語れり。友成すなわちその名を問えば「我等は住吉と高砂の松の精なるが、いま仮りに相生の夫婦と現われ来たりたり、住吉にて再び見ゆべし」といゝ捨て、小舟に乗りて海上に去る。友成、住吉に行きて見れば、住吉の明神すなわち御姿を現し給い、舞楽を奏して君が代の千秋万歳を壽ぎ給うたり。　半能

敦盛の梗概

源氏の武将、熊谷次郎直実は、一の谷の合戦で年端も行かない平敦盛を討ち取ったのですが、あまりの痛ましさに無常を感じ、出家して蓮生と名乗りました。敦盛の菩提を弔うために一の谷を訪れると、笛の音が聴こえ草刈男たちが現れます。蓮生が、話しかけると、中のひとりが笛にまつわる話をします。

蓮生が不審に思うと、男は、「自分は敦盛に縁のある者で、十念（「南無阿弥陀仏」と十回唱えること）を授けて欲しい」と話し、敦盛の化身であることをほのめかして姿を消しました。（中入）

その晩、蓮生が敦盛の菩提を弔っていると、敦盛の霊が往時の姿で現れます。自分を弔う蓮生は、以前は敵でも今は真の友であると喜び、懺悔の物語を始めます。寿永二年（一一八三年）の秋の都落ち、須磨の浦での侘び住まい、平家一門の衰勢を語り、最期を迎える前夜の陣内での酒宴のさまを想起して舞を舞います。そして、一の谷で、舟に乗ろうと波打際まで進んだところで、熊谷次郎直実に呼び止められて一騎打ちとなり、討たれた戦いの場面を見せ、蓮生に回向を頼んで去っていきます。　半能

盆山の梗概

盆山とは、お盆の上に石・砂・小樹を植え、風景を表した箱庭の様なものです。近頃方々で盆山が流行っているため、男は良い盆山をもっている何某に、前々からほしいと頼んではいるが中々貰えません。

そこで、男は月夜の晩に屋敷に忍び入りますが、何某に見つかってしまいます。

あわてた男は盆山の影に隠れますが、知り合いの男と分かった何某はからかってやろうと考え、今隠れているのは人ではないと言います。そう言われた男は必死になってごまかそうとします。

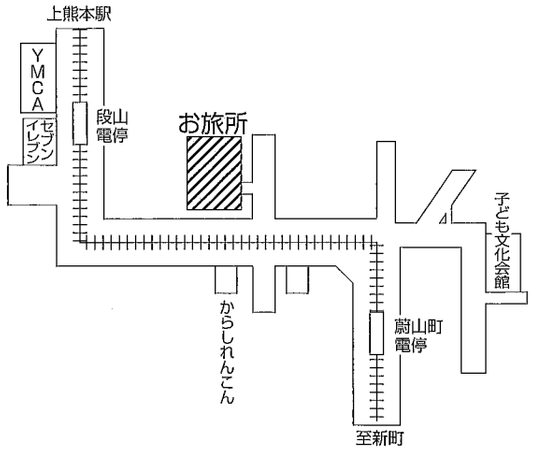
六浦の梗概

洛陽の傍より出でたる僧、東国修業の途次、相模の国六浦の里に着きたれば、所の称名寺に立寄り、折から山々の紅葉せるを眺むるに、庭の此方に一樹の楓のみ一葉も紅葉せざるに不審を抱き、人に尋ねんと思いたたずみたり、たまたま此処に女出で来れるより、斯くと尋ぬるに「是は昔鎌倉の中納言為相卿と云う人、紅葉を見んとて此の所に来り給いしが山山の紅葉未だなりしに此樹のみ深く紅葉せるを見（如何にして此の一本に時雨けん山に先立つ庭の紅葉ば）と詠ぜしより以来、樹は功成り名遂げて身退くは天の道なりと言う古語を信じて、今に紅葉を止め常磐木の如くなり」と答えたり。されば僧は手向の歌など詠み「かほどまで此木の心を知ろしめす御身は如何なる人ぞ」と問えば、「まことは我は此の木の精なり」とて姿を消しぬ。頓て夜更けし頃、楓の精貴方の女の形にて現われ、舞をまい「仏果を授け給え」と願いて失せにけり。　半能

野守の梗概

出羽の国・羽黒山の山伏が、大峯葛城へ向かう途中に大和の国・春日の里に着きます。名所を尋ねようと人を待っていると、野守（春日野の番をする者）の老人がやってきます。山伏が池について尋ねると、その池が「野守の鏡」であることを教え、また、野守の鏡とは、鬼神が持っていた鏡でもあると語ります。さらに山伏は、「はし鷹の野守の鏡」と和歌に詠まれたのもこの水のことかと尋ね、野守はそのいわれについて語ります。山伏は真の野守の鏡を見たいと言いますが、鬼の持つ鏡は恐ろしいものであるから、この水鏡を見るようにと言い置いて塚の中へ消えていきます。（中入）

里人から野守の鏡の由来などを聞いた山伏は、塚の前で祈祷します。すると、鬼神が鏡を持って現われ、四方八方、天界から地獄まで、様々なものを鏡に映し出します。やがて鬼神は鏡を山伏に渡し、大地を踏み破って、奈落の底へと入っていくのでした。　半能



藤崎八旛宮 御例大祭 能 組

令和六年
第四百十五回

御能組

日時　九月十六日（月）　九時～
場所　段山御旅所　能楽殿
雨天決行

金春流　素謡
翁　東　軍三
村上芳明

金春流　半能
高砂　網谷洋志
飯冨雅介　岡　充
白坂保行　田中　達
飯冨章宏　相原一彦

喜多流　半能
敦盛　中川琢朗
坂苗　融
白坂保行
飯冨章宏　森田光次

和泉流　狂言
盆山　男　田嶌晴雄
何某　山内理至

金春流　半能
六浦　秋山純晴
橋本　宰
白坂信行
古田知英　吉谷　潔
内田秋則

喜多流　半能
野守　友枝真也
岡　充
白坂信行
古田知英　吉谷　潔
浦　政徳

附祝言